

参考 2

平成 20 年 4 月 21 日
(社) 国土緑化推進機構

第 19 回「みどりの文化賞」受賞者の決定について

(社) 国土緑化推進機構は、第 19 回「みどりの文化賞」受賞者を、下記のとおり決定いたしました。「みどりの文化賞」の表彰は、来る 5 月 10 日、日比谷公園小音楽堂前広場で開催する、第 19 回森と花の祭典-「みどりの感謝祭」の式典において行います。

「みどりの文化賞」受賞者には、

- ア みどりの感謝祭名誉総裁秋篠宮殿下下の表彰状
 - イ 社団法人国土緑化推進機構からの賞牌
- が授与されます。

記

1 テーマ 民間団体による国際緑化活動の推進

2 受賞者 財団法人 オイスカ

3 選考基準

(社) 国土緑化推進機構は、平成 2 年、「緑と水の森林基金」による事業として、緑や森林に関し顕著な功績のあった者を顕彰する「みどりの文化賞」を創設しました。

毎年、「緑と水の森林基金」運営審議会でテーマを設定し、そのテーマに関して最も貢献された個人又は団体を選考しております。

4 受賞理由等

別紙のとおり

問合わせ先： (社) 国土緑化推進機構
担当： 矢内 電話 3 2 6 2 - 8 4 5 7

別 紙

第19回「みどりの文化賞」受賞理由

- 1 (財)オイスカは、1969年に設立以来、人と自然が調和した世界の発展を目指し、主にアジア太平洋・南米地域で国づくりや農業を中心とした人材育成・植林活動を中心とした環境保全、国際理解活動の推進など NGO としてグローバルに活動している。
- 2 1980年から、森林の大切さやその役割、植林の国際協力の重要性を幅広く国民に啓発すると共に、アジア太平洋の青年たちが自発的に取り組む植林活動への協力・支援、海外植林ボランティアの派遣、植林プロジェクトの支援費調達のための募金活動や啓発活動などを推進、90年代からは、「海の森」であるマングローブの植林、また、2000年からはサンゴ礁の保全や砂漠緑化の取り組みなど、多様なセクターからの支援による国際緑化活動を推進してきた。
- 3 海外植林活動でのこれまでの植林面積は、1万1,400 ha(07年3月末現在)に及んでいる。
2000年から始まった、タイ、インドネシアにおけるマングローブ植林プロジェクトでは、これまで約2千 ha に植林され、このプロジェクトの実施により、マングローブ林は津波の被害から守り海の幸をもたらす大切な資源であり、現地の人々に環境問題やマングローブに関する知識を得る機会となり、マングローブ林を守り共生する機運が大きく盛り上がってきた。
- 4 また、中国においても砂漠化の進行により砂嵐による農作物被害など、地域住民に大きな被害をもたらし、黄砂の増大など国内外での被害が深刻になっていることから、砂漠化防止プロジェクトが行われるなど、世界各地で緑化活動が行われている
- 5 1991年から、「緑の地球を未来の子どもたちに」のキャッチフレーズのもと、世界各地の子どもたちが、自分たちの学校の敷地などで木を植える活動を通じて、木を守り育てる大切さを学び、緑を愛する心を培ってもらい、植林活動と環境教育を組み合わせた「子供の森」計画を展開してきた。
これまで、東南アジア、中南米、アフリカなど26の国と地域で、3,489校において植林活動が展開され、その植林面積は3,600 ha、植林本数は590万本に及んでいる。

6 この計画の着実な展開は、オイスカの人材育成研修を受けた現地スタッフのバックアップで支えられており、「子供の森」活動は、地域の住民を巻き込み、緑化の輪は確実に地域社会に波及しており、点としての学校から面としての地域社会へ、やがて地球を緑でいっぱいにするとの思いがこの事業に込められている。

7 1980年、熱帯雨林の破壊・減少などを食い止めるため、「苗木1本の国際協力」キャンペーンを開始し、海外植林ボランティアツアー」がスタートした。

現在、ツアー先はタイ、フィリピン、インドネシア、中国などのアジアを中心として各国に広がっており、現地の人々と木を植えるだけでなく、現地の住民との交流、相互理解を深め、現地の人自らが、緑を守り、自分たちのふるさとをよりよいものにしていこうとの意識づくりにもなっている。

毎年、1,500名にも及ぶ海外植林ボランティアツアーが実施されており、次代を担う人々が相互に理解を深め協力して環境を育てていく活動が今後とも大いに期待されている。

8 こうした活動が国際的に高く評価され、財団法人オイスカの母体であるオイスカ・インターナショナル(1961年設立)が、1989年「国連青年功労賞」、1993年「国連地球サミット賞」を受賞、また、1997年には国連経済社会理事会で、国連 NGO の最高ランクをである、カテゴリー(現 General 総合諮問資格)に認定された。

9 以上のように、(財)オイスカの海外での緑化活動は、27年という歴史と幅広いネットワークをもち、これまでの植林面積は1万1,400 ha に及び、また、「子供の森」計画は世界各地の約3,500校で実施され、多くの植林ボランティアが参加するなど多様な活動を展開しており、国際緑化活動をリードする NGO として高く評価されるものである。

団体の設立・代表者等

1969年 財団法人 オイスカ 設立
代表 中野良子
(特定公益増進法人)

会員数 個人 3,885人
法人等 1,958団体

(参照1)

みどりの文化賞について

1 趣旨

緑豊かな国土と新しい森林文化の創造に資する観点から、平成2年(社)国土緑化推進機構は「みどりの文化賞」を創設、毎年「緑と水の森林基金運営審議会」の議を経て定められるテーマに関して最も功績のあった者(個人または団体)を対象として顕彰する。

2 選考方法

国土緑化推進機構は、毎年テーマに則した選考基準を定め、機構が指名する「みどりの文化賞候補者推薦人」から推薦を受け、それに基づいて、有識者で構成する「みどりの文化賞選考委員会」において受賞者を決定する。

3 表彰

「みどりの週間」中に開催される「みどりの感謝祭」の式典において表彰する。

みどりの文化賞受賞者には、

みどりの感謝祭名誉総裁(秋篠宮殿下)の表彰状

国土緑化推進機構会長の賞牌

を授与する。

(みどりの文化賞選考委員)

(五十音順)

梅原	猛	(国際日本文化研究センター - 顧問)
倉本	聡	(脚本家、自然・文化創造会議議長)
佐々木	恵彦	(日本大学総合研究所教授)
田部井	淳子	(登山家)
西澤	潤一	(首都大学東京学長)
古川	清	(元東宮大夫、元アイルランド国大使)

(参照2)

「みどりの文化賞」のこれまでの受賞者

- 第1回 (テーマ) 戦後の森林造成と国土緑化
(受賞者) 徳川宗敬 氏 (故人)
- 第2回 (テーマ) 木の文化の継承、発展に貢献した者
(受賞者) 西岡 常一 氏
- 第3回 (テーマ) 森林と水との関わりを社会にひろめる
(受賞者) 財団法人 水利科学研究所
- 第4回 (テーマ) 森林と水の守り手, 山村を支える(個人)
(受賞者) 黒澤 丈夫 氏(群馬県上野村村長)
- 第5回 (テーマ) 森林と水の守り手, 山村を支える(団体)
(受賞者) 宮崎県諸塚村
- 第6回 (テーマ) ボランティア活動による森林づくり
(受賞者) 草刈り十字軍
- 第7回 (テーマ) 持続的森林経営をめざす森林づくり
(受賞者) 高橋 延清 氏
- 第8回 (テーマ) 大都会のなかでの自然豊かな森林づくり
(受賞者) 明治神宮の森
- 第9回 (テーマ) 海を蘇らせた森林づくり
(受賞者) えりも岬の緑を守る会
- 第10回 (テーマ) 「森林文化」の新たな展開
(受賞者) 筒井 迪夫 氏
- 第11回 (テーマ) 民間公益団体による緑化活動支援
(受賞者) ゴルファーの緑化促進協力会(GGG)
- 第12回 (テーマ) 上下流の協力による森林づくり
(受賞者)(財)矢作川水源基金
- 第13回 (テーマ) 国際緑化活動の推進
(受賞者) 神足 勝浩 氏
- 第14回 (テーマ) 地方自治による山村活性化への取り組み
(受賞者) 松形 祐堯 氏
- 第15回 (テーマ) 国民参加の森林づくり運動の推進
(受賞者) 高木 文雄 氏
- 第16回 (テーマ) 民間団体等による「国民参加の森林づくり」運動支援
(受賞者) 株式会社 ローソン(ローソン緑の募金)
- 第17回 (テーマ) 森林を活かし、木の文化の伝承に貢献した者
(受賞者) 小原 二郎 氏
- 第18回 (テーマ) 森林文化を未来に引き継ぐ森林管理
(受賞者) 神宮司庁営林部(伊勢神宮宮域林)